

〔研究ノート〕

蕪村画の魅力 —俳諧の気味について—

蕪村が歿して間もない享和元年(1801)、二十六歳の中林竹洞は『画道金剛杵』の中で当時の画壇を評しながら次のように述べています。——古人も画は高業と云て、ことにけだかくめでたきしわざなるを(中略)この比大雅蕪村の画世人ことに称歎す、げに大雅は高遠轉達の趣は得たれど、蕪村は今少したらぬ所あり。そは何があしきと云に、今の世に俳諧とかいへるものゝ気味、わづかに画中にあらはるるを失とす——

竹洞が言う蕪村のあしき画というものは、所謂俳画すなわち略筆の画に俳句や俳文を添えたものを指しているのではありません。と言うのは、同書の最後にある古今の画人を九段階に分けた表の中で、蕪村はちょうど真中の五番目のランクに、唐画の画家としてあげられており、山水人物を得意とするが「俳気有ルヲ以テ恨ミト為ス」と評されていることから判ります。

一見唐画風でありながら、俳気の横溢した作品と言え、東京国立博物館にある「山野行楽図屏風」があげられます。特に左隻では、童僕を従えた文人が谷辺を逍遙するという文人画によくある題材を描きながら、一行の様子には何となくおかし味が漂っています。山道に疲れたか、童僕に尻を押してもらう者あり、肩を借りる者あり、軸物を携えた童僕が大丈夫かとの

ぞき込めば、引張った袖がぬげそうになって叫声を発している老人もいる、まことにユーモラスな情景が描かれています。画家の人間観、人生観はその人物表現に最もよく表われるもので、正統な文人画を志す若い竹洞にとっては、多分、蕪村のこんな表現が気に食わなかったのでしょう。

しかし、蕪村にとっては、こうしたユーモアこそ最も大切なものだったに違いありません。それは蕪村が画家であると同時に当代一の俳諧師だったからです。

俳諧連歌はもとより真面目で典雅な連歌に反撥して生まれ、滑稽諧謔を旨とするものです。日本の詩歌の流れを見ますと、一つのものが盛んになると、必ず高遠で優雅な世界を目指すようになり、それが極点にまで達して堅苦しいものになると、今度は一見卑俗とも思える笑いの精神が頭を擽げて来て、息のつまりそうになっていた詩歌の世界を揺さぶって生返らせるのです。振返ってみれば、連歌自体がもとは気難しくなっていた和歌から笑いを求めて飛出したものだったのです。つまり、俳諧の本来は精神を蘇生させる処にあったと言えましょう。

このような背景を持つ俳諧を何よりも好んだ蕪村にとって、俳気は単なる諧謔ではなく、ましてや高遠なものを愚弄するためのものでもなかったことは言うに及びません。俳諧で養われた蕪村の眼には、晴と褻(け)の間を揺れ動く人間の、生きた姿がはっきり映っていて、高遠な理想を持つ文人画の中にも、どうしても人生のおかし味を見出さずにはいられなかったのでしょう。

(早川聞多)

山野行楽図屏風(部分) 東京国立博物館蔵



季刊 美のたより No.59

昭和57年 5月 27日

発行 大和文華館